

なん  
「何でも運送業」

○登場人物

成瀬達彦	店長
早乙女弘	店員
三澤亜希子	店員
吉岡ちはる	アルバイト
日詰哲也(男)	強盗犯
原田結花(女)	強盗犯

物流会社「何でも運送業」の仕分け場。

舞台奥に段ボールが所狭しと積みあがっている。

上手奥に、小さなテーブル。

テーブルの上に電話と小物入れ。

達彦と弘が入ってくる。

達彦と弘、段ボールを仕分けして、下手側の二か所に

積んでいく。

仕分けが終わると、地図を広げて、小包のあて先を調

べ始める二人。

達彦、住所を調べ終わり地図を置く。

電話が鳴る。

達彦、さつと電話に駆け寄り、受話器を取る。

達彦

はい、こちら何でも運送業です。……ええ、何でも運びますよ。郵便局や黒猫さんに頼めない、中身が知れたらまずい物だって配達します。秘密は必ず守りますから安心してください。

弘、段ボールを積もうとするが、手をすべらせて落とす。

達彦

おいっ！

弘、手を振って謝る。

達彦  
いままでどんな物を運んできたかって？ それは具体的には  
言えませんがねえ。……ええ、お待ちしてますよ。ただ荷物の中  
身は、事前にこっちで確認することにしてますから。突然、段  
ボールの中で拳銃が暴発しても困るんで。そういうものには  
「危険物」ってシール貼って、慎重に取り扱うことにしてるん  
です。あつ、拳銃っていうのは例えばの話ですから、気にしな  
いでください。……はい、それではのちほど。

達彦、電話を切る。

弘  
あんまり調子に乗って、ぺらぺらしゃべらないでくださいよ。  
拳銃運んでるなんてばれたら、警察に通報されて面倒なこと  
なるでしょ。  
達彦  
実際、そういうものだって運んでるんだから、仕方ないだろ。  
弘  
つい口がすべったんだよ。  
この前の家族全員、北海道まで運ぶっていうのは、俺たちの仕  
事だったんですかね。あれは夜逃げ屋のやることでしょ。何で  
も運送業が、ただの何でも屋になってきてるような気がするん  
ですけど……。  
達彦  
仕方ないだろ、仕事として頼まれたんだから。まさか、段ボ  
ールの中に人を梱包するとは誰も思わないだろ。俺たちのおかげ  
で、うまく夜逃げできたんだから、それでよかったんだよ。生  
きてる人間だって運ぶんだよ、俺たちは。

そこへ、下手から三澤亜紀子が入ってくる。

亜紀子  
あのさ、ぐちゃぐちゃしゃべってないで仕事しなさいよ。あた  
し、もう、車出しちゃうよ。  
弘  
亜紀子、俺、午前中、荷物多いんだよ。少し応援してもらわな  
いと困る。

達彦  
弘、お前、さつき落とした段ボール、中身大丈夫だろうなあ？  
注射針ばっかりだから、大丈夫ですよ、届け先、山梨の山中で  
す。

亜紀子  
それ、不法投棄だね。

弘  
俺は依頼人が書いた住所に荷物を運ぶだけ。

達彦  
やばい荷物はどんどん出せ。

亜紀子  
中身知らなければ、罪悪感にさいなまれなくて済むんだけど  
ね。

達彦 亜紀子、もし注射針が運んでる最中に段ボールから飛び出てきて、病気で移ったら大変だぞ。中身はちゃんと教えてもらわなきゃ、おっかなくて配達できないよ。  
まあ、そりゃあ、そうだけどさ。

上手から、吉岡ちはるがスーツ姿で入ってくる。

ちはる  
達彦  
亜紀子  
達彦

おはようございます。  
おっ、おはようさん。  
誰？

今日から、事務のアルバイトとして、何でも運送業の仲間になつてくれる吉岡ちはるちゃんです。俺が外に出ちゃうと事務所に誰もいなくなっちゃうでしょ。だから、電話番号とか、経理とかやってもらおうと思つてね。彼女、簿記の資格持ってるんだ、適任でしょ。

吉岡ちはるです。趣味はバレエとバイオリンです。ちなみにアルバイトは初めてです。ここで働いて社会勉強させてもらおうと思つてます。よろしくお願いします。

年、いくつ？

えっと、二十歳です。

二十歳でバイト初めてなの？

はい。

(あきれて)「はい」って……。

彼女ね、あの吉岡財閥のご令嬢さんなの。ちよつとピントがずれてるところがあるけど、お嬢様だから勘弁してあげてよ。

(冷たく)そんなお嬢さまに、うちの仕事が理解できるんですかね。

弘、頼むよ。歓迎ムード作つてよ。仕事の内容はちゃんと説明してあるの。秘密も絶対厳守って伝えてある。

ただ単に店長の好みで雇つたんじゃないの？

そっか。そういうことか。

亜紀子、俺は仕事とプライベートはきっちり分けるタイプだよ。好みで雇つたわけじゃない。

こんな世間知らずなお嬢様を雇つて、私たちの仕事をほろつと誰かに漏らされたら、どうするんですか？

ちはるちゃんは、そんなことしないよね？

はい、私は秘密はちゃんと守りますよ。  
ほら。

達彦  
ちはる  
達彦

亜紀子

達彦

弘

亜紀子

達彦

弘

達彦

亜紀子

ちはる

亜紀子

ちはる

ちはる

弘  
達彦

ほんとに大丈夫なのかなあ？  
大丈夫だって。最近、何でも運送業の常連さんも増えてきて  
きてるんだから人手が必要でしょ。

亜紀子  
達彦

もっとほかに適任な人がいるんじゃないの？

あのさ、これ、普通の仕事じゃないんだよ。そこらへんのお  
ばさん雇ったら、すぐに通報されて大騒ぎになるよ。社会の  
モラルとかに無関心で、ちよつと浮世離れしている、ちはる  
ちゃんみたいなのが、うちにはびつたりなの。

ちはる

あの、それって、褒められてるんですか？

達彦

褒めてるんだ。君はうちに必要な人材だ！

亜紀子

時給いくら？

達彦

七百元……

弘

七百元！？

亜紀子

いまだき、七百元のバイトって安すぎるでしょ。

達彦

ねっ、世間知らずでしょ。それで来てくれるんだから、うち  
にはびつたりだよ。

ちはる

あの、私、本当にここで働かせてもらえるんでしょうか？

三人

よかったですあ、じゃあ、頑張っちゃいますね。

ちはる

達彦

じゃあね、そのテーブルの席についてもらつて、この前、  
説明した通りに伝票の整理をお願いします。あとね、電話が

弘

鳴ったら、出てね。社員の自己紹介は配達が終わったあと  
で。いま時間ないからね。

ちはる

わかりました。

ちはる

わかりました。

ちはる、伝票整理を始める。

弘

(腕時計を見て)やべっ、もう九時だ！

亜紀子

弘、あたしの車に乗せるの、どれ？

弘

適当に、通り掛けに行けそうな荷物、いくつか抜いてほし  
い。

亜紀子

すぐに出ようと思ってたのに。

弘

ケチなこと言うなよ。俺だって、そっちの荷物が多い時は助  
けてるだろ。

達彦、弘、地図を見ている。

亜紀子、下手側の段ボールを調べている。

下手から、覆面をした男と女が入ってくる。

男  
達彦 おいつ!  
(仕分けしながら) ちはるちゃん、お客様だ。

ちはる、席を立って、

ちはる

い、いらっしやいませ……。

女

ここ、何でも運送業ですよね?

ちはる

ええ、佐川さんや黒猫さんに頼めないような荷物を引き受けます。

男

ちよつと、車が壊れちゃってさ、金、運んでほしいんだよ。

ちはる

お金?

三億二千万、いますぐ配達してほしいの。いま、私たち、警察に追われてるから。

達彦、弘、亜紀子、手を止めて男と女を見る。

達彦

あんたら、何やってきたの?

男

何だと思う?

弘

銀行強盗。

男

正解。

弘

正解でも、あんまりうれしくない。

女

現金輸送車奪って、別の車にお金を乗せ換えるつもりだったのに、その車が壊れちゃったのよ。

達彦

現金輸送車!?

亜紀子

その車、どこに停めてあるの?

男

表に決まってるんだろ。

達彦

弘、トラックのシートで、覆いかけてこい!

弘

あんた、この仕事引き受けるのか?

達彦

金次第だ。

弘、下手に駆け出ていく。

達彦

いくらだ?

女

何が?

達彦

報酬だよ。三億二千万円の運送代。いくら出してくれる?

男

5%、一千六百万円でどうだ?

達彦

ふざけんな。そんな金で引き受けられるか。どれだけこっちが

女

リスク背負うと思ってるんだ!

じゃあ、倍の三千二百万。それなら文句ないでしょ。

達彦 甘い。金と一緒に二人の強盗犯も運ばなきゃいけないんだ。その分を上乗せしろ。  
男 あんた本気で引き受けてくれんのか？  
達彦 危ない橋はいくらでも渡ってきた。ちょっと警察のほうにもコネがあるんだ。金さえあればどうにでもなる。  
女 じゃあ、思い切って5千万！！  
達彦 それは、警視庁のお偉いさんに払い込む金だ。もっと上乗せしろ。  
男 だったらこれでどうだ？

男、人差し指を立てる。

達彦 指が一本足りねえんじゃねえか？  
男 だったら、現金輸送車に乗ったまま、逃げ回れ。どっかで捕まるのがオチだけだな。

女 (男に) ねえ、ここに頼むしかないよ。代車が壊れちゃった時点であたしたちの尽きてるんだから。

男 (女に) レンタカーが壊れるなんてことがあっていいのか…

女 (男に) 大きなことをやり遂げるためには障害が付きまとうものなのよ。これはきつと神様が私たちに与えた試練よ。

亜紀子 (冷静に) 試練じゃなくて、悪いことした罰だと思うけど。

男 俺だってやりたくて銀行強盗やったわけじゃねえんだよ。やむにやまれぬ事情があつて、こんな無茶なことを……。

達彦 まあ、事情はあとで聞きますよ。交渉成立しないときは、とつとと出て行ってもらわないと困るからね。人差し指の隣についている中指を立てるのか、立てないのか、それが問題だ。

男、達彦に向けて中指を立てる。

達彦 (ムツとして) ちはるちゃん、警察に電話して。  
ちはる はい。

男 勘違いするなよ。これから人差し指も立てるから。  
達彦 中指立てて仕事頼むやつがどこにいるんだ。

女 (男に) ねえ、早くしないと、どんどん不利になっていくよ。わかったよ、二億だ、二億。警視庁のお偉いさんに払い込む五千万差し引いても、取り分はあんたたちのほうが多くなる。それなら満足だろ。

達彦 よしっ、交渉成立だ。こりゃあ、大仕事になるな。

亜紀子 ちよつと待って。あたしはそれ手伝わないからね。  
達彦 なんで？

亜紀子 店長、この仕事、引き受けたら、あたしたちも立派な共犯者になるよ。分け前まできっちりもらっちゃうわけだから。

達彦 運送代だよ、分け前じゃない。

亜紀子 そういうのを屁理屈（へりくつ）っていうのよ。とてもじゃないけど、ついていけない。

達彦 今まで一緒に仕事して、危ない橋渡ってきて、ここ一番の大仕事で逃げんのかよ。

亜紀子 銀行強盗なんてうまくいくわけないでしょ。うまくいった例なんて三億円事件ぐらいしか知らないわよ。

達彦 成功した例があるってことじゃないか。

ちはる あの、銀行強盗ってやっていいことなんですか？

男 やっちゃいけないに決まってるんだろ。そんなの常識だろ。

ちはる だったらあ、すぐに警察に行って、ごめんなさいって謝ってきただほうがいいと思います。間違いの一つや二つ誰でもありますよ。

女 ねえ、ここの店長、誰？

達彦 （自分を指さして）私です。

女 このスーツ着てる女の子、クビにしたほうがいいわよ。今の状況が全然わかってないみたいだから。

達彦 そこがいいところなんです。このちはるちゃんから見れば。銀行強盗なんて大した犯罪じゃないんです。謝れば済むと思ってるんです。

ちはる 店長が捕まったら、この会社潰れますよね？

達彦 潰れちゃうね。

ちはる バイトもやめなくちゃいけませんよね？

達彦 そうだね、会社がないのにバイトはできないからね。

ちはる だったらあ、この仕事、引き受けないほうがいいと思います。

達彦 でもね、うちの会社は名前の通り、何でも運送業なんだよ。どんなものでも拒まず配送する。それが大手にはない、うちの会社の強みなんだよ。例えば、銀行から盗んだお金でも、お客様に

運んでくれて頼まれたら、引き受けるのがこの会社のやり方なんだ。

ちはる ちはるちゃん。この人ね、人生踏み外す典型的なタイプだから、よく見ておくといいよ。こんな人間に絶対なっちゃだめ。

亜紀子 ちはるちゃん。この人ね、人生踏み外す典型的なタイプだから、よく見ておくといいよ。こんな人間に絶対なっちゃだめ。

ちはる はい。

弘、下手から戻ってくる。

弘 現金輸送車に、シートかけてきました。  
達彦 早いね、さすがプロだね。早すぎるよ。  
弘 シートで覆っても、めちゃくちゃ怪しいですよ。  
達子 亜紀子、うちのトラック、横付けしておいて。道路のほうから怪しい車が見えないように。  
亜紀子 だから、あたしは協力しないって言ってるじゃん！  
達彦 上司命令だ。従わないならクビにする。  
亜紀子 やってられるか、バカ！

亜紀子、早足で下手に出ていく。

弘 店長、いいんですか、追いかけてなくて。  
達彦 すぐに戻ってくるよ。あいつはここ以外、正社員として雇ってくれるところはないんだから。  
弘 ……。  
男 おいつ、どうでもいいけど早くしてくれよ。  
達彦 ちはるちゃん、小包ラベル出して。  
ちはる はい。

ちはる、テーブルに戻る。

男 小包ラベルなんてどこに貼るんだよ。  
達彦 現金の入ったジュラルミンケースに。  
男 いらねえよ、ラベルなんて貼らないでくれ。金と一緒に俺たちと運んでくれればそれでいいんだよ。  
達彦 こっちは仕事として引き受けてるんだよ。あくまで金を運ぶだけだ。だから、ラベルも貼る。  
女 (男に) ねえ、本当にこの人たち、信用していいの？  
男 大丈夫だ。前から、この運送屋にはずいぶん世話になってんだ。これが初めてじゃないんだ。  
弘 えっ、常連さんですか？  
達彦 やっぱりそうかあ。どこかで聞いたことある声だなあって思ってたんですよ。  
弘 ……あつ、もしかして哲さん？  
達彦 ああ、そうだ。その声は哲さんだ。覆面なんてしてるからわからなかった。  
男 ばれちゃあ、しょうがねえ。そうだよ、山木組の日詰哲也だよ。結花、覆面外せ。顔なじみだ。



日詰哲也、原田結花、覆面を外す。

哲也  
よっ！

弘  
うわっ、まじで哲さんだ……。

哲也  
また世話になりに来たぜ、よろしくな。

達彦  
哲さん、俺たちの仲で、別に顔隠さなくてもいいじゃないですか？

哲也  
正体がばれないほうがいいと思ったんだよ。

弘  
んで、哲さんが銀行強盗なんか……。

哲也  
ちよつと事情があつて、高跳びするカネが必要になつたんだ。

哲也  
でもそんなカネ引つ張ってくるあてもねえしな。仕方な

達彦  
く銀行強盗に及んだつてわけだ。

哲也  
そっちの女性は？

達彦  
俺と一緒に高飛びする女だ。

哲也、結花を抱き寄せる。

亜紀子が、下手から戻ってくる。

亜紀子

(不服そうに)トラック移動させました。

達也  
さすが亜紀ちゃん。俺は信じてたよ、お前ならやつてくれるつて。

亜紀子

言っておきますけど、私はただ車、移動させただけですから。

達也  
あとは何もしません。

亜紀子  
昔の男の依頼でも？

哲也  
それ、どういう意味？

亜紀子  
よっ、亜紀子！

哲也  
げっ、哲也！

お前にはすぐばれると思つたけどなあ。けっこう鈍感だな。またシャブやつてんのか？

亜紀子  
やつてねえよ！

哲也  
ちよつと、哲ちゃん、何これ？

結花  
何つて？

哲也  
(亜紀子を指さして)この人、何？

結花  
ああ、こいつは俺の昔の彼女。元カノつてやつだ。気にしないでいい。

結花  
(亜紀子を見て)ふうん、哲ちゃん、こういう人と付き合つてたんだ。

亜紀子  
何よ、あんた何か文句あんの？

結花  
ずいぶんガサツな感じだなあつて思つて。

亜紀子 悪かったわね、あんたこそ何よ。人前で肩なんか抱かれちゃつてき。恥じらいってものがないわけ？

結花 いいじゃん。いま哲ちゃんとは私は、特別な関係なわけだし。

亜紀子 特別でしょうね。グルになって現金輸送車襲ったわけだから。

結花 意味が違うでしょ！

亜紀子 それ以外のことに關心なし。この人とはもう切れてるの、関係は。

結花 哲ちゃん、信じていいの？

哲也 フラれたの俺のほうなんだよ。だから心配しなくていい。

結花 え、こんな女に哲ちゃんがフラれたの、ショック！

亜紀子 こんな女って、あんたねえ……。

弘 あのさ、今はそんなことで揉めてる場合じゃ……。

亜紀子・結花 うるさい！

パトカーのサイレンが聞こえてくる。

全員、退場する。

パトカーが通り過ぎていく。

哲也 おいつ、早くしてくれ。ぼやぼやしてる場合じゃない。

全員、出てくる。

達彦 弘、お前、車に積んである荷物全部抜いて、そこに現金積みこめ。

亜紀子 今日の配達、どうするの？

達彦 後回しだ。依頼人には、あとから連絡して謝るしかない。

哲也 悪いな。俺のせいだ迷惑かけちまって。

達彦 いいんですよ。哲さんは、今までこの何でも運送業に割りのいいヤバイ荷物、ずいぶん回してくれたから。そのおかげで闇の

運送業として名が知れてきたんです。困ったときはお互い様ですよ。

亜紀子、積みかえるの一緒に手伝ってくれ。

どうして私が？

荷物積みかえるだけだ。罪にならない。

そうやってだんだんと、共犯者になっていく気がする。

もう手遅れだよ。

……。

荷物、積みかえるんだったら、俺たちも手伝う。

よしっ、みんなでやろう。

達彦

哲也

亜紀子

達彦

亜紀子

達彦

亜紀子

弘

亜紀子

達彦

哲也

達彦

哲也

達彦

亜紀子

達彦

達彦

哲也

達彦

哲也

達彦

哲也

達彦

哲也

達彦

哲也

達彦

哲也

達彦

哲也

達彦

哲也

達彦

哲也

達彦

哲也

達彦

哲也

達彦

哲也

達彦

哲也

達彦

哲也

達彦

哲也

弘、亜紀子、哲也、結花、下手に出ていく。

ちはる (席を立てて) あの、私も手伝います。

達彦 ちはるちゃん、警察に電話して。

ちはる えっ？

達彦 早く！

ちはる でも、現金運ぶんじゃないんですか？

達彦 銀行強盗なんてうまくいくわけない。時間稼ぎしてたんだよ。

ちはる 早く警察が来ないかなあって。

達彦 だったら、最初に断ればいいのに。

ちはる いきなり断ったりしたら、あの男がぶち切れて、何するかわからないだろ。優しそうに見えるけど、山木組の日詰哲也っていうのはあっちの世界じゃ、乱暴者で有名なんだよ。

達彦 本場に警察に電話していいんですか？

ちはる 荷物積みかえてるうちに早く。

達彦 わかりました。じゃあ、電話しちゃいます。

ちはる 頼むね、俺、頑張って時間稼ぎするから。

達彦 はい。

達彦、出て行こうとする。

ちはる 受話器を取る。

結花、拳銃を構えて、下手から入ってくる。

達彦 あっ……。

結花 やっぱりそういうことか。話がうまく行き過ぎてると思ったのよね。

達彦 ……。

結花 ちはるちゃんだったっけ。その受話器置いて。置かないと死ぬことになるわよ。

達彦 ちはるちゃん、受話器置いて。

ちはる ……はい。

達彦 ちはる、受話器を置く。

結花 下手から哲也が戻ってくる。

哲也 おいつ、結花。お前、何やってんだ？

結花 哲ちゃん、やっぱりこの人たち、信用できない。いま警察に電話しようとした。

哲也 店長、それは本当か？  
達彦 はい、間違いございません。  
ちはる 銀行強盗なんて、うまくいくわけがないと思います。警察に行つて、頭下げてきてください。  
結花 黙る！  
ちはる はい。  
達彦 哲さん、銀行強盗なんかして逃げ切れるわけないよ。  
哲也 だったら、どうして引き受けるふりなんかしたんだ？  
達彦 うちの大切な社員を傷つけられちゃ困ると思っただからだ。

哲也、ポケットから拳銃を出す。

哲也 じゃあ、お望み通り実行行使だ。荷物を積みかえろ。車はもらつていくぞ。  
達彦 哲さん、一つだけ聞かせてくれ。山木組の若頭まで上り詰めたあんたがどうして銀行強盗を……。  
哲也 そんなことお前に話してどうする？  
達彦 うちに回してきたシャブ。あれ、いろんなルートに流してたけど、山木の親分は知ってたんですか？  
哲也 親分も年食つてさ、暴対法恐れて、麻薬の取引はやめろつて言ってきた。でも、俺は取引を続けてた。その話が組に漏れて、俺がシャブの儲けを丸呑みしてるのがバレた。  
達彦 だったら、高飛びするくらい金あるでしょ？  
哲也 それがねえんだよなあ。俺つてさあ、持つてる金が不思議とその日のうちに消えちまうんだよ。  
結花 派手に遊びすぎるんだよ、哲ちゃんは。  
哲也 遊ぶ時は、徹底的に遊ばないと納得できねえんだよ。お前にだつて、いろいろやつただろ。  
結花 まあ、マンションも買ってもらったし、指輪や時計もね。  
達彦 もっとうまいやり方なかったんですか？  
哲也 時間がなかつたんだよ。組の連中が俺のことを探し回ってる。ヤクザと警察の両方に追われてるなんて、なかなかスリリングだろ？

弘と亜紀子が入ってくる。

亜紀子 えっ、なんなの、この状況。  
哲也 店長が警察呼ぼうとした。だから、こんな状況だ。  
弘 (落胆して) 店長、何やってんですか……。

達彦 銀行強盗なんてうまくいくわけないだろ。  
哲也 弘、積み込み続けろ。結花、お前、こいつらと一緒に行け。俺はこっちを見張ってる。  
結花 わかった。

結花、弘と亜紀子に、あごで合図する。  
弘、亜紀子、結花と出て行く。  
電話が鳴る。  
ちはる、すぐに受話器を取る。

哲也 電話を取るな。動くんじゃねえ！  
ちはる でも、電話が鳴ったから。  
哲也 そういうことじゃねえだろ。場の状況考えろよ。  
達彦 ちはるちゃん、受話器置いて。  
ちはる はい。

ちはる、受話器を置く。  
また、電話のベルが鳴る。  
しばらく鳴り続けて、電話のベルが止まる。  
結花が両手を上げて部屋に戻ってくる。

哲也 結花、見張っとけって言っただろ？  
結花 だって、機関銃持ってるんだもん。  
哲也 誰が？  
弘 俺です。哲さん。

弘、下手から機関銃を持って入ってくる。

哲也 なんで運送屋が機関銃持ってんだよ！  
弘 今日の午前中に中国マフィアに届けることになっていた超危険物です。

哲也 弘、お前、兄弟の俺に機関銃向けるのか？  
弘 俺があんたの舎弟だったのは、昔の話です。  
哲也 おいつ、弘、よく考えろ。俺が警察に捕まったら、お前らがやっつけたことも全部、バレるんだぞ。そしたらお前らも全員、豚箱行きだ。それでもいいのか？  
達彦 ばれてもいいんです。  
哲也 どういう意味だ？  
達彦 日詰哲也、強盗および銃刀法違反で逮捕する。

哲也  
犬の真似なんかするんじゃない。何考えてんだ？  
達彦  
真似じゃなくて、俺は本物の犬だ。

達彦、ズボンのほ家とからゆっくりと警察手帳を出して、哲也に見せる。

哲也  
おいつ、店長。あんた一体、何者だ？

達彦  
東京警視庁特捜部第9課、密輸密売捜査官、成瀬達彦だ。

哲也  
おいつ、犬が密売の手助けしてどうするんだよ。

達彦  
あんたのおかげで、麻薬の密売ルートは、ほぼすべて把握した。三日後には一斉検挙だ。今は拳銃の密売ルートを探ってる。だから機関銃も箱から出てくるってわけだ。

哲也  
じゃあ、お前、最初から俺をはめてたのか？

達彦  
霞が関の警視総監殿が、闇の流通ルートを探るには、そのルートに潜り込むのが一番手っ取り早いと考えていて国民の皆様のお金でかなり強引にぶっ建てた会社が、この何でも運送業だ。刑事が、元シャブ中女とヤクザ上がりを雇ってんのか？

哲也  
二人とも裏社会の事情には精通してた。だから、社員として雇うにはうってつけだった。

哲也にスポット。

ヘリコプターの音が響く。

達彦  
応援が来たみたいだ。日詰、拳銃を捨てろ。

結花  
哲ちゃん、もう無理だよ、あきらめよう。

哲也  
この男だけは、撃ち殺してから豚箱へ行く！

亜紀子が拳銃を持って入ってくる。

亜紀子  
哲也、もうやめなよ。

哲也  
亜紀子、お前が警察に通報したのか？

亜紀子  
そうよ。

哲也  
余計なことしやがって。

亜紀子  
刑事撃ったら、二度と刑務所から出れなくなるわよ。

哲也  
お前もこいつが刑事だって知ってたんだな。知ってて俺をはめたんだな。

亜紀子  
麻薬の取引をやめてほしかったの。シャブ中になって私みたいに人生おかしくなっちゃう人がたくさんいるから。

哲也  
賢くなったな、お前も。

亜紀子

哲也、あんたもバカじゃないでしょ。拳銃下ろしなさい。不幸になる女がまた一人増えるから。

哲也、結花を見て、

哲也

……くそつ。

哲也、拳銃を下ろす。

達彦

刑務所で更生して、まっとうな人間になってシャバに戻ってきてください。

哲也

お前の運送屋のほうが、よっほどまともじゃねえだろ！

達彦

弘、表まで二人を送ってやれ。強盗犯を刑務所に送り届けるのも、何でも運送業の仕事だ。

電話が鳴る。

ちはる、すぐに受話器を取る。

ちはる

(明るく) はい、こちら、何でも運送業です！

(幕)